

「蝶のような蛾」

3年生の子どもに「蝶と蛾のちがいは何ですか?」と聞いてみました。これが実にいろいろで、面白かったです。

「かわいいのがチョウチョで、かわいくないのがガ。」
「さわって大丈夫なのがチョウで、さわっちゃいけないのがガ。」
「羽がきれいなのがチョウで、きれいじゃないのがガ。」
「花のみつを吸うのがチョウで、吸わないのがガ。」
「ガは毒を持っていて、チョウは持ってない。」
「チョウは昼間に飛ぶけど、ガは夜に飛んで、電気（灯火）に集まる。」
「チョウは羽を閉じてとまる。ガは羽を開いてとまる。」
「チョウの幼虫はイモ虫で、ガの幼虫は毛虫。」
「ガの幼虫はまゆをつくるけど、チョウの幼虫はつくらない。」

どれも実態とだいたい合っています。実は、蝶と蛾の境界線は非常に曖昧で、生物分類上の境界線と、我々が抱いている「蝶と蛾のイメージ」とは必ずしも一致しません。上記の子どもが持っているイメージも、あてはまるものが多いのですが、特に蛾に関して例外が多すぎて、「この特徴があれば蝶、この特徴がなければ蛾。」と言えるものは一つもないのです。しかし、間違いなく言えることは、子どもたちは蝶には好感を持っていて、蛾には嫌悪感を持っていることです。蛾と知ったとたん「キモっ!」と投げ捨てるわけです。

分類上の非常に乱暴な言い方をすれば、「蝶は蛾の一種」ということになります。九州大学の昆虫学者だった白水 隆博士は、蝶と蛾の見分けについてこんな記述をしています。

・・・蝶と蛾をどういう点で区別したらいいかと言うと、我が国における限りでは、両者の区別は触角の形によるのが無難である。すなわち、チョウは先のふくれた「こん棒状」の触角を持っているが、ガのほうは「糸状・くし状・羽毛状」をしたものが多く、中にはスズメガやスカシバ類のように太いものもあるが、こん棒状ではない。しかし、世界のチョウ・ガに眼を向けると、ガのなかまにもこん棒状の触角を持ったものもいるし、ちょっと見ただけではチョウかガか区別しにくいようなチョウもいる。・・・

私はこの記述に、結構「ストンと落ちる」ものを感じました。蛾か蝶かわからない昆虫を見る時に、無意識に触角を見ていることが多いものです。確かに触角が「くし状」になれば、即決で「蛾」です。大型の蛾の「くし状の触角」に、激しく嫌悪感を抱く方も多いのではないのでしょうか? (私もその一人。)



「蛾の触角（左）と蝶の触角（右）」 蝶の触角はほぼ例外なく「こん棒状」です。

私の山荘の近くにシシウドがあります。朝、散歩をしていると、シシウドの花に、水色とオレンジの蝶が蜜を吸っていました。とてもきれいでかわいいので写真に撮りました。名前がわからず、蝶の図鑑で調べましたが、似たものすら見つかりません。私はもう一度触角を拡大して見たら「くし状」でした。蝶のように見えたのは、蛾だったわけです。蛾の図鑑をめくったら、「ヒョウモンエダシャク」というシャクガの一種と、すぐにわかりました。



「ヒョウモンエダシャク（豹紋枝尺）」 *Arichanna gaschkevitchii gaschkevitchii*
昼間に花の蜜を吸っていました。どう見てもきれいなチョウチョ。蛾には見えませんね。



「ヒョウモンエダシャクの触角拡大写真」

この写真を見れば、即決で「蛾」ですね。蛾も口吻で花の蜜を吸うことがよくわかります。

蝶のように見える蛾はたくさんいます。中には「アゲハモドキ」のように、明らかにアゲハの真似（擬態）をしている蛾もいます。逆にセセリチョウ科の蝶の中には、「どう見ても蛾でしょ、これは！」という蝶（例えば「コキマダラセセリ」）もいます。しかし触角は確かに「こん棒状」です。

子どもたちに蛾と蝶の見分けを聞かれたら、「これで絶対に見分けられるという決め手はないよ。でも触角の形はよく観察してごらん。」と答えることにしています。

（お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋）